

フランスにおける非文字文化遺産 -その歴史、職業専門家養成方法、新たな課題-

ジュヌヴィエーヴ・ガロ

はじめに

皆さん、

まず、このシンポジウムの主催者の方々に、私をご招待くださったことに対して深く感謝申し上げます。この非文字文化資料に関するシンポジウムに出席できることは、私にとってまことに光栄であり、非常に名誉なことと感じております。

文化遺産は近年、その範囲が大幅に広がってきました。文化遺産を支えるもの、そして文化遺産に関する資料が多様化する中で、文字・非文字、有形・無形の文化遺産を保存し、その充実を図り、将来の世代へ伝える任務に携わる人々の仕事はより複雑になってきています。

このような変化に対応するため、フランスでは1990年に国立文化遺産研究所（INP:Institut National du Patrimoine）という革新的な機関が設立されました。その目的は、文化遺産の職業専門家（プロ）、特に仕事が多岐にわたる複雑になってきている学芸員や修復家を養成することにあります。当時は、実践の場でも理論的にも有形の文化遺産が重視されていました。それから15年経った今、INPは、「生きた」文化遺産の台頭によって生まれた新たな課題に直面しており、その取り組みを緊急に進める必要に迫られています。

最初に、フランスにおける非文字文化遺産の歴史と現在の課題についてお話しします。次に、国立文化遺産研究所とその職業専門家養成コースについて説明し、あわせて文化遺産のプロが時代の要請に対応するために身につけなければならない新たな能力についてお話ししたいと思います。

1. 非文字文化遺産：その歴史と新たな課題

(1) 博物館の発明と発展

フランスにおける非文字文化遺産の状況を特によく示しているのは博物館です。近代の博物館は、イタリアのルネサンスに源を発する比較的新しい発明です。博物館という発想は、メディチ家のコレクションを下敷きにして、15世紀後半に生まれました。博物館（museum）という言葉は、女神たちの神殿を意味するムセイオン（mouseion）というギリシャ語が起源となっています。

写真1

写真2

16世紀になると、「珍品収集」が盛んになり、特別に注文して描かせた絵画とともに、珍しく貴重なもの、コインやメダル、自然物、鉱物、貝殻、さらにはコンパスや望遠鏡などの計測器が一同に集められる

ようになりました。現代の多くの博物館の中核をなしている大コレクションのいくつかは、16、17、18世紀の間に集められたものです。例えば、歴代ローマ法王のコレクションを始め、フィレンツェのメディチ家、ウィーンのアプスブルク家、ミュンヘンのヴィッテルスバッハ家、ナポリのブルボン＝パルマ家、サンクトペテルブルクのロマノフ家、パリのブルボン家とヴァロワ家のコレクションなどです。フランス最初の博物館は、東フランスのブザンソンに1694年に設立されました。ルーブル美術館の前身である中央美術博物館は、フランス革命後の1793年8月10日に開館しました。

こうして、博物館は「美術の共和主義」を体現するものとなりました。「博物館は、教師が若い生徒を指導する場所、父親が息子を連れて行く場所、つまり学校のような存在であるべきである」と、画家ダヴィッドは宣言しました。博物館には学びの場所としての役割を果たすという使命がありますが、それは博物館開設の基本原則の一つだったわけです。

19～20世紀の間に、博物館はいくつかの新たな分野を対象とするようになりました。工芸や装飾芸術、科学・技術、民族学、ポップアート、現代美術などです。そして今やフランスには、国が認めているものだけでも1,200以上の博物館があります。この傾向を「博物館熱 (museomania)」と呼ぶ人もいます。ルーブル美術館には毎年約600万人、ポンピドゥセンターには毎年約500万人もの人が訪れます。

写真3

フランスでは、博物館の新たな法的枠組を定めた法律が2002年1月4日に施行され、収蔵品の保存と一般への公開、職員の技量などについて、国家が博物館に求める基準が設定されました。

(2) 歴史的建造物

フランスには、歴史的建造物を保護するという強い伝統があります。現在40,000件以上の建造物が何らかの形で保護されており、15,000件が「歴史的建造物」として登録されています。これにはあらゆる種類の建造物が含まれます。宮殿、宗教施設、軍事施設、産業・農業関係建造物、庭園、工業技術関連建造物、現代邸宅などです。登録建造物をもっとも多いのはパリ近郊のイル・ド・フランス地区で、その数は3,800件に上ります。

写真4

写真5

フランスでは、1887年3月30日に施行された法律により、歴史的建造物が法的な保護を初めて受けるようになりました。今日採用されている保護システムは1913年12月31日施行の法律に基づいており、何度か改定されたものの、現在もなお有効です。

(3) 文化遺産の職業専門家

フランスでは、文化遺産に対する関心はゆっくりとしたペースで高まり、フランス革命後に国民の道義心の中に深く根付きました。それ以来、我々の歴史の象徴である文化遺産を保護するため、絶えまない努

力が重ねられてきました。文化遺産にかかわる学芸員は長い間ボランティアでしたが、20世紀後半には職業として確立しました。この面では、国立古文書学校、エコール・デュ・ルーブル、そして後になって国立文化遺産研究所が多大な貢献をしています。

現在、学芸員は、それぞれが担当する建造物やコレクションに関する登録、保存、記録、拡充、利用者への便宜供与などの仕事に従事しています。できるだけ多くの人々に、文化遺産の豊かな恵みを伝えることも仕事の一つです。また、それぞれのチームを束ね、予算を管理し、スポンサーを確保し、自らの所属機関が地元でも、全国的にも、国際的にも評価されるよう努めています。さらに、修復家など文化遺産関係の他の分野の職業専門家とも連携を深めています。これからは、学芸員、修復家の双方が協力することによって、我々の文化遺産の保護、共有、伝承を確かなものしていくことになります。

(4) 新たな課題：生きた文化遺産

話を進めるにあたって、本日のホスト国である日本が先進的に取り組んでいる無形文化遺産保護について触れないわけには行きません。日本では、1950年に無形文化財を保護する法律が制定され、人間国宝という考え方が生み出されました。

これからの博物館は、収藏品という枠を超えて進まなければなりません。博物館は、人間が作った、目に見える有形の物の重圧としがらみから自らを解放すべきなのです。言語あるいは音楽による口碑、風習やノウハウ、共同体のしきたりや儀式などにもっと敏感に取り組んでいくべきです。無形の物と「作り出された物」を分けて考えるべきではありません。両者は本質的には同じです。

ここで我々が考えなければならないのは、マルセル・モースが言うところの「全体としての社会的要素」です。つまり、ある物について研究したり何かを提示したりするというのではなく、それを作り出した動作、それが作り出された背景が問題なのです。重要なのは、人間と人間の周辺環境や現実との関係を明らかにすることです。それによって、我々はフランスのエコミュージアムの創始者ジョルジュ・アンリ・リヴィエールが提唱した原理に立ち返ることになります。リヴィエールが目指したのは、博物館を日常生活文化に対する認識を高めるための活動拠点に変えることでした。

現在パリでは、アフリカ、アメリカ、オセアニアの美術や文化を対象とする新しい博物館、ブランリー岸博物館が建設中です。この博物館はマリオ・フンベルト・ルス・ソーサの言葉に沿ったものになるでしょう。ソーサは、「マヤの世界を訪れるときは、鼻の穴を開いて行かなければならない。ココアの香り、あるいはタバスコの灼熱の太陽の下で油脂を力強く発散するココナッツの髓の匂いを深く吸い込むのだ」と言っています。さらに彼はこう言うのです。「これほど沢山の香りを博物館の展示ケースに閉じ込めることができるだろうか？」¹

ブランリー岸博物館を支えるのは、相互に作用し合う、活発で、学際的な「ミュージアム革命」とも言うべき運動です。こうした運動は、かけがえのない文化遺産の探求と伝達のために新しい方向性を切り開

いていくことでしょう。

15年前にフランス政府が国立文化遺産研究所を設立したのは、文化遺産に将来かかわることになる職業専門家に、前述の多様な変化がもたらしたニーズに応える能力を身につけさせるためです。それでは研究所の活動についてお話ししましょう。

2. 国立文化遺産研究所：職業専門家の養成方法と新たな課題

国立文化遺産研究所は、文化省の管轄下にある国の機関です。研究所には、文化遺産を扱う学芸員と修復家を育成するという二つの使命があります。パリ市内のコルベール美術館と郊外のサン＝ドニ・ラ・プレーヌの二ヶ所に分かれています。

写真6

(1) 文化遺産学芸員の養成

毎年、非常に競争率の高い入学試験によって約40人が選抜され、博物館、歴史的建造物、歴史資料、考古学、目録、産業・技術・自然遺産のうちいずれか一つの専門分野について訓練を受けます。INPは、主として非文字文化遺産の多岐にわたる分野の修復家の養成を行っています。文字文化遺産についても、歴史資料の分野で修復家を養成していますが、図書館関係のものはありません。

INPの学芸員養成コースは、講義、セミナー、実地研修などで構成されており、養成期間は18ヶ月です。このコースは文化遺産のプロの養成を目的とし、受講生が学生時代に受けた専門的訓練を補完するものです。受講生は、歴史学、美術史学、考古学、自然史学、自然科学のいずれかについて高等教育を修了していることが必要です。法律学、経済学、政治学のような、全く違う専門分野から受講生を受け入れることもあります。学芸員養成コースの受講生は、INPに入る前に少なくとも修士号を取得していることが望ましいとされています。

INPの授業細目には、文化遺産の法律と経済、公共施設の運営、人材管理、予防的保存および修復、文化遺産施設の建設および設備、文化の媒介、外国語などが含まれています。受講生はフランス国内および国外の文化遺産を扱う機関で実地研修を受けることになっています。また、必修科目に加え、個人的な研究(Ph.D.レベル)を進めることも求められます。コースの修了にあたっては、文化遺産学芸員の認定証書を与えられ、国あるいは地方自治体で公務員として働くことになります。

(2) 文化遺産修復家の養成

INPの修復家養成コースは、学芸員養成コースとは全く別のもので、養成期間は5年です。コースを受講できるのは、金工／陶磁器／ガラス／エナメル、紡織工芸、グラフィック・アートおよび書籍、絵画、彫刻、写真、家具の7つの専門分野のいずれかにおいて厳しい選抜試験に合格した者で、合格者は毎年20人程度です。

写真7

修復家養成コースは、講義、フィールドワーク、国内外の文化遺産関係機関での実地研修などで構成されており、理論と実践、科学と芸術をバランスよく学ぶ方式が採用されています。外国語教育も行われます。受講生は、最先端の設備を持った作業場で訓練を受け、公的機関から INP に依頼された文化財を使って実習を行います。研究所には試験室があり、実際の保存修復作業に先立って、素材の分析や検査が行われます。また、受講生はいつでも豊富な蔵書をもつ図書館を利用することができます。

受講生は、コースの修了にあたって、文化遺産修復家の認定証書（修士レベル）が与えられます。フランスでは、修復家は独立した職業人であり、個人・公的機関いずれからの依頼にも対応できます。

(3) 国際協力

これまでの私の話からお分かりのように、INP は多岐にわたる訓練プログラムを提供しています。その多面的な経験を活用し、INP は外国のパートナーとの間で数々の協力事業を行っています。中国では博物館の館長を対象としたセミナーを開き、アフリカでは文化遺産と自然遺産との関係についてのセミナーを開催しました。アルバニアでは 18 世紀の教会の壁画を保存するためのフィールドワーク、モロッコでは現地の修復家のニーズに合わせた訓練コースを実施しました。このほか、ベニスの文化遺産の保護に関するセミナーも開催しました。

国際協力はフランス国内および海外の文化遺産にかかわる専門的職業の発展に寄与するところが非常に大きく、また、文化遺産関係の仕事に従事する人々すべてが取り組むべき課題の広がり理解するのに役立ちます。

写真 8

(4) 早急に求められる新しい能力

文化遺産のプロには、適応能力が必要です。民族学博物館においては、無形文化遺産のコレクションは細心の管理が必要なコレクションであり、このことを十分に認識する必要があることに気がつかなければなりません。モダン・アート美術館では、パフォーマンス、声、身体、さらには、牛乳、蠟、蜂蜜、脂肪、肉、菜っ葉など奇妙な生きた素材も、新しい「資料」として考慮しなくてはなりません。学芸員は今や境界のない、時としてつかの間の存在である有形文化遺産とともに、絶えず拡がり続ける無形文化遺産にも対処しなければならないのです。

学芸員も修復家もこのような新しい課題に対応できなければなりません。そのために INP では、受講生の好奇心を刺激し、技量の向上を常に図っていますが、その手段として特に先端技術の集中的活用にあります。また、すでに文化遺産のプロとして活躍している人々に対する継続的な教育プログラムにも力を入れています。例えば、INP は文化遺産関係の専門職業分野に対するニーズの変化について、さまざまなテーマでセミナーを主催しており、毎年、約 1,000 人の文化遺産のプロが参加しています。

結論：文化遺産に対する新たなアプローチに向けて

文化遺産についての考え方の相違は、西洋的思考プロセスに原因があるとこれまでずっと言われてきました。しかし、そうした相違を克服し、一つの知的、科学的、専門的アプローチの中で、有形・無形文化遺産の価値と文字・非文字文化遺産の豊かさを調和させる時が来ました。文化遺産は、それが持つ多くの側面や特質をすべて考慮に入れなければ、持続させることも生き残らせることもできません。文化遺産の間に仕切りを設けることをやめ、そうした仕切りが及ぼす不合理な影響を防ぎ、グローバルで活力ある統合という論理に置き換えなければなりません。

「過去の記憶のない人々に未来はない」とは哲学者ポール・リクールという言葉です。リクールが言う未来をすべての人々に保証するのは、過去の記憶のかけがえのない伝達者、つまり文化遺産のプロです。我々の文化が持続し、共通の夢の実現に向けて前進を続けるためには、そうした文化遺産のプロ、そしてその知見と研究が必要なのは当然ですが、同時に、彼らの人間主義に基づく信念の力、つまり文化遺産を共有し、未来に伝えていこうとする意志も重要です。

1 Quoted by Aurore Monod-Becquelin, in *Quelques réflexions sur l'immatériel : la parole et le musée du Quai Branly*", ICOM, Letter of the French National Committee